新潟県民主医療機関連合会ニュース Vol. 189

新潟民医連に加盟する法人・事業所の取り組みを紹介します。　2024年 5月17日（金）
発行者：宮野　大

息の長い支援が必要と感じた…

能登震災被災地への訪問行動

2月末から4月末まで全日本民医連の能登震災被災地への訪問行動が行なわれました。全国の延べ500人が、輪島市の健康友の会会員と輪島診療所の患者さん約3000軒に要望の聞き取りや生活支援を行ないました。4/24～26までの第18クール行動に新津総支部事務局の吉田健さんと机文明さんが参加しました。

～お二人からのレポートを頂きましたので、紹介します～

＜復旧の大幅な遅れを視認＞

輪島の市街地の大通りの復旧はされていましたが、一歩裏通りに入ったり、周辺の山あいの地域に行くと、まだ倒れたまま、あるいは倒れかけのまま次第に傾いている家屋や陥没したままになっている道路も目立ちます。1日目に雨が降ったので、2日目の朝、市街地を見て回ったときは材木の匂いが漂っていました。危険判定のため、あるいは避難生活のため中の整理もできず、正月飾りのまま、あるいは雪囲いをしたまま、正月から時が止まっている家もあります。

それでも焼け野原になった朝市通りの一角に焼けた材木で囲った花壇を見たり、「頑張って営業中」の張り紙をした商店があったり、復興への強い意志を感じる場面もありました。

＜傾いた棚板の復旧・タンスの引き起こしに「5人で1時間」＞

輪島中心部から30分ほども離れた山裾の集落を訪問したとき、会員さんは地震以来避難したままでしたが、それを教えてくれた近所の女性が家の中の被害状況を見せてくれました。集落に残っている人は半分以下ということで、過疎化が一層進みそうな状況でした。初対面の男性2人を家に上げて丁寧に説明してくれたのも、よほどさびしかったからではないかとも感じました。

荷物を載せたまま傾いてしまった棚板の復旧と倒れたタンスの引き起こしを高齢世帯で行ないましたが、参加者5人がかりでも1時間以上かかりました。高齢のご夫妻だけでは困難だったでしょう。現地は高齢化が進み、こうしたお宅はまだまだ残されています。

＜今後も要望のある息の長い支援＞

現地コーディネーターは、今後、仮設住宅への入居が進むと家具や家電の搬入などの要望も増えると予測していましたし、輪島診療所の朝会では仮設入居者の疎外感が語られており、そうした面での支援も必要になってきます。友の会の活動や受託していた介護予防事業も順次再開、あるいは仮設住宅で新しく始めたいということもお聞きしました。

新潟市の西区の液状化被害と同様、簡単に復旧できる災害ではありません。関心を満ち続け、息の長い支援に取り組みたいと感じました。

参加された吉田さん、机さん、本当にお疲れ様でした。

正月から時が止まっている家

焼け野原になった朝市通りの一角に焼けた材木で囲った花壇

全国からの支援者（輪島診療所前で）